# 「ブラボー！！！」

作　グミガスキー

## 作品概要

私の中には舞踏家と詩人がいる（気がする、あくまで）。そして私は舞踏家でもなければ、詩人でもない。彼らは私がなりたかった存在かもしれないし、別の時間軸の私なのかもしれない。同じように、私の中には灰色の王がいて、老人がおり、若い娘がいる（気がする、あくまで）。まぁ、でも本当にいるのかはわからない。

私にとって「戯曲とは何か？」はそんな自分のなかにいる有象無象。〝ぼんやり〟としか自分の中にいなかった彼らを〝くっきり〟存在させることのできるチャンスであった（今回に限って言えば）。

今なら戯曲とは、自分のなかの〝ぼんやり〟を〝くっきり〟に変える作業であると断言できる（今回に限って言えば、あくまで）。

**登場人物**

ババ・ダンカン　舞踏家
ランプ係
ギルモア・リンチ　詩人
王
老人
ピピ　若い娘
ライトブルー人間たち
客1～16　お客さん

①

5つのランプ

やや薄暗い舞台。
舞台上にはひも付きのスタンドランプが一定の間隔を開けて5つ、横に並んでいる。
下手から順にランプ1、ランプ2、ランプ3、ランプ4、ランプ5。
ランプ1の左横には一人掛けのソファが置かれてある。
ソファには、舞踏家ババ・ダンカンが座り、眠っている。
沈黙。
目を覚ますババ（首を回したりして、眠気を取ろうとする）。
ババ、5つのランプをぼんやりとした目つきで眺める。
間。
ババ、ゆっくり立ち上がる。

ババ　（ランプを見ながら首をかしげ）ん？

ババ、自分独自のストレッチをしながら上手へ向かい歩く（その間もランプから目は離さない）。

身体をほぐしながら、ランプ1〜5の間をうろつくババ。

ソファの前まで戻り、ストレッチを一段落させ、それからおもむろに舞踏を始める。

しばらくやって、ババ、あまり気に入らない様子。

ババ　（あごに手をやり）ふむ。

ババ、しばし考えに耽る。

ゆっくりとランプの方を向く。

間。

それから上手へ向けて歩き始める。

ランプ３の前で立ち止まるババ。

間。

ババ、ランプ３のひもを引く。

するとランプ３の明かりがつき、と同時に男の声が朗読を始める（朗読は劇場のスピーカーから流れる）。

男の声　では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎的性格は、どこから来るのか？　明らかに、この形態そのものからである。人間的労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間的労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという（カール・マルクス『資本論』、新日本出版社、２０１９年、ｐ１３０）

ババ、ランプ３のひもを引く。すると、明かりが消え、朗読も止む。

沈黙（ババは客席に背を向けている）。
ババ、もう一度ランプ3のひもを引く。
すると、ランプ3の明かりがつき、朗読の続きがスピーカーから流れる。

男の声　形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がそのなかで発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取る。したがって（同書、p130）

ババ、ランプ3のひもを引く。すると、明かりが消え、朗読も止む。
間。ババ、静止して、考えに耽る。
ババ、ランプ3のひもを何度も引き、明かりをつけては消してを繰り返す。
すると、朗読も流れては止んでを繰り返す。
ひもを引く（点灯）

男の声　商品（同書、p130）

ひもを引く（消灯）

ひもを引く（点灯）

男の声　形態（同書、p130）

ひもを引く（消灯）

ひもを引く（点灯）

男の声　の神秘性は、単（同書、p130）

ひもを引く（消灯）

ひもを引く（点灯）

男の声　に次のことに（同書、p130）

ひもを引く（消灯）

沈黙。ババ、考えに耽る。

それから、ババはランプ3のひもを引く。すると、ランプ3の明かりがつくと同時に資本論の続きの朗読が流れる。

間。耳を澄ますババ。

ババ、朗読に合わせて身体を動かし始める。

ババ、しばらく舞踏。

ババ、ランプ3のひもを引く。すると、明かりが消え、朗読が止む。

沈黙。やや満足気なババ。

ババ、ランプ5の前に行き、ランプ5のひもを引く。すると、ランプ5の明かりがつき、ウッドベースの音が流れる（ウッドベースはスローテンポのジャズの曲を演奏している）。

ババ、流れる音に耳を澄ませ、考えに耽る。

あたりをうろつき始めるババ。

しばらくうろつき、ふいに舞踏を始める。

ババ、ウッドベースの音に合わせ、しばし舞踏（先ほどよりは短め）。

途中、演奏も舞踏も熱を帯びる。

気がすんだババ、ランプ5のひもを引く。するとランプ5の明かりが消え、ウッドベースの演奏が止む。

沈黙。

ババ　（腕を組んで）ふむ。

間。

次にババはランプ4のひもを引く。すると、ランプ4の明かりがつき、控えめな鳥の鳴き声が流れる。

間。しばらく流れる鳥の鳴き声。

ババ、ランプ4のひもを引く、するとランプ4の明かりが消え、鳥の鳴き声も止む。

何度かうなずくババ。

次にババはランプ２のひもを引く。すると、ランプ２の明かりがつき、ある男の生活音が流れる（バスルームの戸を閉める音。ため息。シャワーのカランを回す音。シャワーから水が出る音。

男が足を洗う音。シャワーのカランを閉める音。バスルームの戸を開け、男がバスルームから出、戸を閉める音。タオルを取り足を拭く音。バスルームのドアを開け、男がキッチンまで歩く音。コーヒーミルをキッチンのワークトップに置く音。コーヒー豆の入った紙袋を開ける音。コーヒー豆をコーヒーメジャーですくい、コーヒーミルへ入れる音。男がゆっくりミルを回し、コーヒー豆を砕く音。↑この音がしばらく続く）

ババはそれらの音を聞きながら、なに

かをじっくり考えている。
それから、思いついたようにランプ4のひもを引く、すると、ランプ4の明かりがつき、控えめな鳥の鳴き声が流れる。
かくして男の生活音に控えめな鳥の鳴き声が添えられるかたちになる（ランプ2の音はミルをゆっくり回し、コーヒーを砕く音）。
それらを聴き、おもむろに舞踏を始めるババ。
ババ、しばらく舞踏。
それから、ババはランプ1の前に行き、ランプ1のひもを引く（舞踏をしながら）。すると、ランプ2、ランプ4の明かりが消え、それぞれの音声も止み、ランプ1の明かりがつき、でかいオナラの音が一発だけ鳴る。
そしてどこからか観客の笑い声が流れる。

客1　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！

客1、着席。

間。

ババ、ランプ1のひもを引く。すると、ランプ1の明かりが消える。

沈黙。

ババ、ランプ1のひもを引く。すると、ランプ1の明かりがつき、でかいオナラの音が一発だけ鳴る。

そしてどこからか観客の笑い声。

客1　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！

客1、着席。

間。

ババ、ランプ2のひもを引く。すると

、ランプ２の明かりがつき、ある男の生活音が流れる（椅子に座った男がテーブルにあるコーヒーカップを取り、コーヒーをすする音。コーヒーを飲む喉の音。コーヒーカップをテーブルに置く音。間があいて、一連の音が繰り返される）。

ババ、ランプ４のひもを引く。すると、明かりがつき、控えめな鳥の鳴き声が流れる。

流れる音声は、男が鳥の鳴き声に耳を澄ませながら、ときおり、コーヒーをすすっているように聴こえる。

間。

ババ、ソファに座る。

間（ランプ２とランプ４の音声は流れたまま）。

舞台上手から、ランプ係（小柄で意地悪そうな顔の中年）、登場。

ランプ係、ランプ４とランプ２のひも

を引き、明かりと音声を消し、ソファのそばまでやって来る。

ババ、ランプ係に耳打ちをし、ランプ係、うなずく。

ランプ係、ランプ2のひもを引く。すると、ランプ2の明かりがつき、ある男の生活音が流れる（男が木の床の廊下を行ったり来たりする足音）。

間。ランプ係はランプ2の前で止まっておく。

ランプ係、歩き出し、ランプ3のひもを引く。すると、ランプ3の明かりがつき、先程、止まった箇所から資本論の朗読の続きが流れる。

流れる音声は、男が廊下を行ったり来たりしながら、資本論を朗読しているように聴こえる。

ババ、しばらく耳を澄まし、何かをつかみとる。それから、立ち上がり、舞踏を始める。

ババ、しばらく舞踏。
ランプ係はランプ3の前に立ち、ババの舞踏を眺めている。そして、ややあって、ランプ4のひもを引く。すると、ランプ4の明かりがつき、控えめな鳥の鳴き声が流れる。
ババ、微妙に舞踏の調子を変える。
ババ、またしばらく舞踏（ここらあたりから、だんだん舞踏は熱を帯びてくる）
そして、舞踏がピークに向かう頃、ランプ係がランプ1のひもを引く。すると、ランプ2、3、4の明かりが消え、それぞれの音も止み、ランプ1の明かりがつき、でかいオナラの音が一発、鳴る。
ババはその音声に舞踏を中断させられる（ランプ係をにらむ）。
どこからら観客の笑い声。

客1　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！

客1。着席。

沈黙。ババ、ランプ係をにらんだまま。

ランプ係、気まずそうにランプ1のひもを引く。すると、ランプ1の明かりが消える。

沈黙。

ランプ係、ランプ2のひもを引く。するとランプ2の明かりがつき、ある男の生活音が流れる（室内を歩く男の足音、そしてときどき、誰かがドアをノックする音）

ランプ係、室内を歩く男の足音に合わせて歩き、ランプ5の前まで行く。すると、ある男が歩くのをやめ（ランプ係も同時にやめる）、部屋の隅に寝そべるウッドベースを起こし、構える音

が流れる。
誰かがドアをノックする音。
ランプ係、ランプ５のひもを引く。すると、ランプ５の明かりがつき、ウッドベースの演奏が始まる。
舞台上に鳴っている音は、早朝、窓の開いた室内の隅で、ある男がウッドベースを演奏しているように聴こえる。
そして、ときどきドアをノックする音が鳴る。
ババ、舞踏を始める。
ランプ係はランプ３のところへ行き、ランプ３のひもを引く。すると、ランプ３の明かりがつき、ラジオのチューニング音が鳴り、それからＡＭラジオのような音質で、資本論の朗読の続きが、先程オナラによって中断された箇所から始まる。
ランプ係、ランプ４のひもを引く。すると、ランプ４の明かりがつき、控え

め目な鳥の鳴き声が流れる。
舞台上に鳴っている音は、早朝、鳥の鳴き声が入って来る室内の隅で、ある男がラジオから流れる資本論の朗読に合わせてウッドベースを演奏しているように聴こえる。そして、ときおりドアをノックする音が鳴る。
ババ、それらの音に合わせて、しばらく舞踏。
資本論の朗読がしだいに熱を帯びてくる。すると、ウッドベースの演奏もそれに呼応し、熱を帯びてくる。すると、ババの舞踏もそれに呼応し、熱を帯びてくる。
ババ、舞踏を続ける。
そして、舞踏がピークに達したとき、ランプ係がランプ1のひもを引く、すると、ランプ2〜5の明かりが消え、それぞれの音が止み、代わりにランプ1の明かりがつき、でかいオナラの音

が一発、鳴り響く。
どこからか観客の笑い声。

客1　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！

客1、着席。
沈黙。ババ、オナラの音が鳴ったときの舞踏のポーズのまま、凍ったように静止している。
ランプ係、ぼろぼろの外套のポケットに手をつっこみ、中から電球を取り出す。
ランプ係、ランプ3の電球を今しがたポケットから取り出した電球と取り換える（外した電球は外套のポケットへつっこむ）。
ランプ係、ランプ3のひもを引く。すると、明かりは点滅を繰り返し、明かりがついたときのみ、資本論の朗読の

一部分が繰り返される。

例）明かりがつく、「逆である」明かりが消える。

明かりがつく、「逆である」明かりが消える。

明かりがつく、「逆である」明かりが消える。

このように、明滅と一言を繰り返しながら、徐々に明るさと音声がフェードアウトしていき、ついに舞台上が真っ暗になる。

②詩人のＭＰＣ（あるいは、どちらがより詩人であるか）

舞台中央にはシンプルな作りのステンレスのテーブルと椅子。

テーブルの上にはＭＰＣ２０００。そして、その隣にはドイツ語版の資本論

が置いてあり、その上には１４個のナポリタンチョコが並んでいる。

沈黙。

ギルモア・リンチ、下手から登場。

ギルモア、椅子に座り、ＭＰＣ２０００を見て、眉をひそめる。

ギルモア、ナポリタンチョコを一つ手に取り、包みを開け、食べる（包みはテーブルのてきとうなところにくしゃっとして置く）。

チョコを食べながら、無表情でＭＰＣを見つめるギルモア。

ギルモア、ＭＰＣの電源を入れる。

間。

ギルモア、ＭＰＣのＰＡＤ１を押す。

すると、ＰＡＤ１に入っている音声が流れる。

ＰＡＤ１　やはり、価値は、さしあたり、この形態とは無関係に考察されなければなら

ない。（カール・マルクス『資本論』、新日本出版社、２０１９年、ｐ７２）

以下、ＰＡＤ２～１６に入っている音声は左の通りである。

ＰＡＤ２　鉄、紙などのような有用物は、どれも、二重の観点から、質および量の観点から、考察されなければならない。（同書、ｐ６６）

ＰＡＤ３　商品流通は、形式的にだけでなく本質的にも、直接的な生産物交換から区別される。（同書、ｐ１９８）

ＰＡＤ４　確かに（同書、ｐ１９８）

ＰＡＤ５　ｃ　鋳貨。価値章標（同書、ｐ２１８）

PAD6　みずからが使用価値であることを実証しなければならない（同書、p154）

PAD7　2　相対的価値形態と等価形態との発展関係（同書、p122）

PAD8　特定の商品、すなわち、金である。（同書、p126）

PAD9　彼の欲求は絶えず更新され、他人の商品を絶えず買うことを命じるが、（同書、p228）

PAD10　他面では彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に左右される。（同書、p228）

PAD11　したがって、リンネル価値に対象化された労働とまったく区別されない労

働の凝固体であることが見てとれるような一身体をつくることにある。このような（同書、ｐ１０６）

ＰＡＤ１２　ところが、彼らは、彼が王であるから、自分たちは臣下であると思うのである。（同書、ｐ１０５）

ＰＡＤ１３　十五シェッフェルの小麦（同書、ｐ９７）

ＰＡＤ１４　鹿が清水を慕いあえぐように（旧約聖書、詩編、四二・二）、ブルジョアの魂も貨幣を、この唯一の富を求めて慕いあえぐ。（同書、ｐ２４０）

ＰＡＤ１５　落丁、乱丁がありましたらおとりかえいたします。（同書、ｐ２５５）

ＰＡＤ１６　でかいオナラの音が一発。

ギルモア、ランダムにＭＰＣのＰＡＤを押す（ＰＡＤ１６だけは押さないようにする）。
しばらくＰＡＤを押して遊んだ後、最後にＰＡＤ１６を押す。すると、でかいオナラの音が一発、鳴り響く。
どこからか観客の笑い声。

客１　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！

客１、着席。
ギルモア、怪訝な表情で客１を見つめ、それからＭＰＣへ視線を戻す。
間。

ギルモア　（つぶやく）Ｄａｓ ｉｓｔ ｍｅｉｎ Ｇｅｄｉｃｈｔ.

沈黙。

ギルモア　（確信をもって）Das ist mein Gedicht.

ギルモア、ナポリタンチョコを一つ手に取り、包みを開け、食べる（包みはテーブルのてきとうなところにくしゃっとして置く）。

ギルモア、テーブルに右ひじを置き、ほおづえをつく。

ギルモア、資本論の上に並んでいる1 2個のナポリタンチョコを見つめ、〝ひょっとして〟という表情をする。

沈黙。ギルモア、チョコを見つめたまま（資本論の上のチョコはまるでSP 404のPADのように並んでいる）

間。

ギルモア、おそるおそる資本論の上に並ぶナポリタンチョコのどれか一つを

押す。すると、スネアドラムの音が一発、鳴る。

間。

ギルモア、別のナポリタンチョコを押す。すると、バスドラムの音が一発、鳴る。

バスドラムのチョコを何度も押すギルモア。（押した分だけ、バスドラムの音が鳴る）。

ギルモア、別のナポリタンチョコ連打する。すると、押した分だけクローズハイハットの音が鳴る。

このようにして、資本論の上のチョコはサンプラーのＰＡＤと同じ働きをしており、１２個のチョコにはそれぞれ、生ドラムの音がチョップされて入っている（細かい指定はなし）。

ギルモア、資本論の上のチョコをランダムに押す。すると、タム類やシンバル類の音がチョコに入っていることが

わかる。
ギルモア、一通りチョコを押してチョコに入った音を確認した後、ＰＡＤを押すのをやめる。

ギルモア　Ｎｏ，Ｑｕａｎｔｉｚｅ．

ギルモア、舌を、メトロノームの様に四回鳴らして、チョコを叩き、Ｊｄｉｌｌａのようなビートを奏でる。
首をタテに振り、ノリノリなギルモア。きっちり１６小節チョコを叩くと、ギルモアはチョコを叩くのをやめる。
しかし、音は止まず、先に叩いた１６小節がループされる。
首を振り、しばらく自分の作ったビートにノるギルモア。

ギルモア　（大声で）Ｄａｓ ｉｓｔ ｍｅｉｎ Ｇｅｄｉｃｈｔ!!!

ギルモア、ＭＰＣ２０００のＰＡＤ１６を叩く。すると、でかいオナラの音が鳴る。

どこからか観客の笑い声。

客１　（客席に混じっている。拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！！

客１、着席。

ドラムループは鳴り続けている。

ギルモア、ＭＰＣのＰＡＤをてきとうに叩き（ＰＡＤ１６以外）、ＰＡＤに入っている音声をドラムループの上に乗せまくる。

しばらくの間、パフォーマンス。

そして、ループの終わりに合わせて（つまり１６小節目に）、一拍ごとにＰＡＤ１６を叩くギルモア。すると、でかいオナラの音が一拍、二拍、三拍、

四拍、と四回鳴り響き、パフォーマンスが終わる（ドラムループ止む）。
すると、どこからか観客の笑い声。

客1〜16　（客席に混じっている。拍手をしながら立ち上がり）ブラボー！！！

客1〜16、しばらく拍手。

客1〜16、着席。

ギルモア、満足気な表情。

間。

ギルモア、右肘をテーブルに置き、ほおづえをついて考えに耽る。

沈黙。

上手から老人、登場。

老人、ゆっくり歩き、上手寄りのテーブル斜め前で止まる。

老人はヨレたグレーのシャツを着て、パイプタバコをふかしている。

老人　（パイプタバコを口から取り、煙を吐き出し、ぼんやりとどこに焦点を合わすでもなく）わからんでもない。

間。

老人　わからんでもないよ。

間。ギルモア、老人に目もくれず、考えに耽っている。

老人　（パイプを吸い、煙を吐き出して）悪くない気はするよな。

間。

老人　……朝はなにかと奇抜なことがしたくなるものだ。

間。ギルモア、ナポリタンチョコを一

つ手に取り、包みを開け、食べる（包みはテーブルのてきとうなところにくしゃっとして置く。

老人　わしにだって朝はあった……。

間。

老人　澄んだ水になったような気がした朝が……。

老人、パイプを吸って煙を吐く。

沈黙。

老人、ギルモアをちらと見やり、再び客席の方を向く。

老人　（ぼんやり、どこに焦点を合わすでもなく）思うに、きみは愛を見つけたほうがいい。

間。

老人　……、きみは愛を見つけたほうがいい。ちくしょう、これはもう言ったな。

沈黙。ギルモア、ほおづえをつき考えに耽っている。

老人　今はもう、思い悩むよりも、ケチャップだとか、尻を掻くことのほうが好きだ。

間。ギルモア、あごを引き、にらむようなかたちで老人を見る。

老人　実は言いたいことなんてなにもないんだ。

沈黙。

老人、パイプを吸って煙を吐き出す。

間。

老人、でかいオナラを一発かます（オナラはスピーカーから流れる）

笑い声や歓声はしない。

溶暗。

③

王

暗い舞台。

舞台中央よりやや上手側に、先ほどギルモアが座っていたステンレスの椅子が斜めに置かれ、男が座っている（舞台は暗さは男と椅子のシルエットがうっすらわかる程度）。

男は両膝に両肘を置き、前のめりの状態で静止している。

ふいにサスペンションライトがひとつだけつき、男と椅子を照らす。

男は王冠を被っており、中世ヨーロッパの王様の恰好（以下、男は王である）。

そして王はモノクロである（モノクロのメイクにモノクロの衣装）。
座ったまま眩しそうにライトを見上げる王。それから、ゆっくりと首を動かし、客席に目をやり、左手で右頬をぽりぽり掻く。
間。
再びライトを見上げる王。
沈黙。
王、舞台の床に視線を落とし、眉をひそめる。
沈黙。

王の心の声　（以下、王の心の声はややざらついた音質で、スピーカーから流れる。疲れ気味に）覗いてはならないものを覗いてしまった。

間。

王の心の声　もはや私の存在意義は砂粒も同然だ。

間。

王の心の声　（王、顔を上げ）夜の岬から、ラッパの音色が聴こえる……。まるで海をなぐさめるかの如く。

沈黙。

王、左肘を左膝に置き、ほおづえをつき、やや左側に身体を傾ける。

王の心の声　内面の奥の、そのまた内面の声……。

間。王、左肘を左膝から離し、ほおづえをくずして。

王の心の声　やはり覗いてはならないものを

覗いてしまった。

間。

王の心の声　私は王であるはずなのに……。

沈黙。

王、右肘を右膝に置き、ほおづえをつき、やや右側に身体を傾ける。

王の心の声　（王、眉をひそめ）うん？　私は王なのか？　（間）何の？　私には何もないはずだ。領地も、臣民も。それなのに王だなんて……。（王、ほおづえをやめる）ふんッ、（王、苦笑い）王とは何だ？　滑稽の類語かなにかか？　それとも心理の代名詞か？　誰しも心の奥底に一匹の王を飼っているとでもいうのか？　（ここらへんから、王の心の声は徐々に熱を帯びてくる）だとしたら私の飼い主は誰だ？　男か

？　女か？　赤子か？　老人か？　それとも森に棲まう得体のしれない不気味な生き物か？　ひとりか？　ふたりか？　ふたり？　あぁ、それもいいだろう。この際、何人だっていいさ。私は本人らが永遠に見ることのかなわない灰色の王として地下の奥深くに君臨し続けよう。彼らが朽ち果ててもずっと！　そうだ。私は飼われている王であり、幽閉された王である。しかし、飼い主の死後も、誰にも気づかれることなく生き続ける存在だ。ハッハ。なるほど、こりゃいい。まさに王だ。他の誰でもなく、私こそが王だ。わかるか？　ただの一度も俗世に晒されたことのない灰色の君主だ。闇に潜み、身体に狂気を供給する者だ。

沈黙。サスペンションライトの明かりがとてもゆっくり暗くなってゆく。

王の心の声　（王、ライトを見上げ）あぁ、

再びの闇だ。私の心が喋りすぎたからか？
私の心の声は波紋の如くうっとおしかったのか？　（間）できるなら、銀塊のように静かにしていたかったのだが……。

サスペンションライトが暗くなるのが止む（舞台は薄く明るい）。
沈黙。

王の心の声　（王、床に視線を落として）このままでは王は腐ってしまう。わかるか？ほとんどの人間が、腐った王にフタをして日々を過ごしている。あぁ、光が欲しい。けれども、見られてはだめだ。これは本来であればありえないことなんだ。

王、ため息をつく。
サスペンションライトが再び暗くなっていき、ついに舞台は真っ暗になる（王と椅子のシルエットが見える程度）。

沈黙。

やがて、王が立ち上がり、舞台をうろつき始める。

しばらくうろつき、王、立ち止まる。

すると、サスペンションライトがひとつだけつき、王を照らす。

眩しそうにライトを見上げる王。

客席に目をやり、左手で右頬をぽりぽり掻く。

王、再びライトを見上げる。

沈黙。

王、舞台の床に視線を落とす。

王の心の声　覗いてはならないものを覗いてしまった。

間。

王の心の声　もはや私の存在意義は砂粒も同然だ。

間。

王の心の声　（王、顔を上げ）夜の岬から、ラッパの音色が聴こえる……。まるで海をなぐさめるかの如く。

沈黙。

王、左手であごをつかみ、やや左側に身体を傾ける。

王の心の声　内面の奥の、そのまた内面の声……。

間。王、左手をあごから離す。

王の心の声　やはり覗いてはならないものを覗いてしまった。

間。

王の心の声　私は王であるはずなのに……。

沈黙。王、右手であごをつかみ、やや右側に身体を傾ける。

王の心の声　（王、眉をひそめ）うん？　私は王なのか？　（間）何の？　私には何もないはずだ。領地も、臣民も。それなのに王だなんて……。（王、あごから手を離す）ふんッ、（王、苦笑い）王とは何だ？

滑稽の類語かなにかか？　それとも心理の代名詞か？　誰しも心の奥底に一匹の王を飼っているとでもいうのか？　（王、このあたりで心の声と同調することに飽き、ゆっくりと下手へ歩いて、そのまま退場）だとしたら私の飼い主は誰だ？　男か？　女か？　赤子か？　老人か？　それとも森に棲まう得体のしれない不気味な生き物か？

ひとりか？　ふたりか？　ふたり？　あぁ

、それもいいだろう。この際、何人だっていいさ。私は本人らが永遠に見ることのかなわない灰色の王として地下の奥深くに君臨し続けよう。彼らが朽ち果ててもずっと！　そうだ。私は

ここで、オーディオの配線がひっこ抜かれたような音がブッと鳴り、王の心の声が止み、同時に舞台が真っ暗になる（今度は、椅子のシルエットすらも見えないほどの深い闇である）。

幕間の踊り

舞台中央寄りやや前方にババ（下手側）とギルモア（上手側）が立っている。

ババとギルモアの後ろでは次の場面の準備が行われている。

ババは右手にティーカップ、左手にソ

ーサーを持ち（ティーカップはソーサーの上に載っている）、ギルモアは左手にティーカップ、右手にソーサー（こちらもティーカップはソーサーの上に載っている）を持っており、二人のティーカップの中には熱々のダージリンティーが入っている。

ババ、ギルモア、踊り始める（それはとてもゆるく簡素な振り付けである）。このとき、二人の頭の中ではパバロッティの『フニクリ・フニクラ』が流れている。

ギルモア、ババ、熱々のダージリンティーには一切口をつけず、しばらく（二分程度）踊る。なお、このとき、踊りによってダージリンティーが舞台上にこぼれてしまってもかまわない。

踊り、止む。

間。

暗転。

④

ピピの愚痴

舞台中央やや後方に丸いガーデンテーブル。その両脇にガーデンチェアが二つ。上手側のガーデンチェアには老人が座り、気持ち良さそうにパイプをふかしている（老人はアロハシャツにカーキ色のハーフパンツ、サンダルといった恰好）。

テーブルの上にはホットコーヒーの入ったマグカップとチェスボードが置いてある。チェスボードの上にはブロンズでできた人差し指のオブジェがまるでチェスの駒のように17個（黒9個、白8個）のっている。

老人、ホットコーヒーをひと口飲み、とても気持ち良さそうにパイプをふかす。

上手からピピ、登場。

ピピはカラフルなヴァケーションワンピースに、洒落たサングラス、ワンピースに合った配色のヒールといった格好。

ピピは早歩きで、ライトグリーンのスーツケースをひきながら、そのまま下手袖へ退場。

沈黙。

老人、もうひと口コーヒーを飲み、パイプをふかす。

下手からピピ、登場。

ピピは早歩きで、イエローのスーツケースを引きながら、そのまま上手袖へ退場。

沈黙。

老人、気持ち良さそうな表情で客席を眺め、ニヤリと笑う。

上手からピピ、登場。

ピピは早歩きで、ピンクのスーツケースを引きながら、そのまま下手袖へ退

場。

沈黙。

老人、チェスボードの上の黒い人差し指を動かし、白い人差し指を取る（取った白い人差し指はチェスボードの横に置く）。

下手からピピ、登場。

ピピは早歩きで、パープルのスーツケースを引きながら、そのまま上手袖へ退場。

沈黙。

老人、パイプをふかし、チェスボードの上の白い人差し指を動かし、黒い人差し指を取る（取った黒い人差し指はチェスボードの横に置く）。

上手からピピ、登場。

ピピは早歩きで、ブルーのスーツケースを引いているが、途中で自分のやっていることがバカらしくなり、立ち止まる。

間。

ピピ、ふと老人を見る。

間。

ピピ、ブルーのスーツケースを引きながらテーブルへ向かい、下手側のガーデンチェアに座る（スーツケースは隣に置く）。

ピピ　（上手袖を向いて）ねぇ！　私にカフェオレをちょうだい。

すると、すぐさま上手からウエイターが、カフェオレの入ったマグカップを持ってやって来る。

老人、パイプをふかす。

ピピ、サングラスを外し、テーブルに置き、ポケットからマッチとタバコを取り出し、タバコをくわえ、火をつける。

ピピ　（煙を吐き出して）もう、イヤんなっちゃうワ。（ピピ、カフェオレをひと口飲んで）あら、美味しい！

沈黙。老人、ピピをじっくり眺める。

ピピ　（老人を見て）なによ！　こんなの、休まなきゃやってらんないわよ。

老人　（コーヒーをひと口飲んでから）君はよくやっているよ。

ピピ　そうかしら？

老人　（うなずきながら）ああ。

老人、パイプをふかす。ピピ、タバコをひと口吸う。

間。

ピピ　ホント、詩人と舞踏家ってやっかいなんだから。あんなやっかいな人種ってちょっとないわよ。あの人たち、本当は同じな

クセに違う人ぶるのよ？　おかげで私はてんてこまいよ！　ひっきりなしにあの二人の橋渡ししなきゃなんないワケ。ああいう人たちってなんであんなにメンドクサイわけ？　キーッ！！　私はビーチでピニャコラーダでも飲みながらノンキに暮らしたいってのにこんな使いっぱしりみたいな事させられて……。

ピピ、ブルーのスーツケースの取っ手をつかみ、前後に揺らしながら。

ピピ　よっぽど中をぶちまけてやろうかしら。

老人、ピピを見ながらパイプをふかす。ピピ、カフェオレを一気に飲み干して。

ピピ　ウエイター！　もう一杯ちょうだい！

ウエイターの声　（上手から）あいよ。

ピピ　あとなにか甘いものはある？

ウエイターの声　フィナンシェがありますぜ。

ピピ　じゃァ、それちょうだい。

ウエイター、上手からカフェオレとフィナンシェを持って登場し、テーブルにその二つを置き、空になったマグカップを持って上手袖へ退場。

ピピ、チェスボードでタバコを消し、吸殻を横に置き、左手でカフェオレをひと口飲み、右手でフィナンシェを食べる。

ピピ　（フィナンシェをほおばりながら）もうッ！　詩人も舞踏家もクソッタレよ！

老人、フィナンシェに手を伸ばす。

ピピ　（老人の手を叩いて）ダメよ。自分の分は自分で注文なさい。

老人　それが、どうもわしには頼めないらしいんだ。

ピピ　どういう事？

老人　ウエイター！　なにか甘い物をくれ！

ウエイターの声　甘い物なんてありゃしませんよ旦那。

老人　（ピピの顔を見て）な？

ピピ　……かわいそうに。でもダメ。

老人　わしにはエスプレッソしか注文できない仕組みになっているらしい。

沈黙。

老人、パイプをテーブルに置く。

ピピ　チョコレートが食べたくなったことは？

老人　このところ毎日だよ。

ピピ　あなたはヴァカンスに来ているの？

老人　さぁな。（間）どうだろう。（間）わしにもわからんよ。

ピピ　（微笑んで）でもなんだか楽しそう。

老人　（ピピを見て）そうかい？

ピピ　ええ。秘訣は何？

間。

老人　いろんな色で働くといい。

ピピ　いろんな色？

老人　あぁ、若い時はつい一つの色だけで働いてしまうものだ。しかしだな、そうするとすぐに凝り固まってしまう。疲れるしな。人間ってのはもっとこう〝ぶよぶよ〟してたほうがいい。だから、いろんな色を使って働くといい。今日は白。明日は赤という具合にな。毎日同じ色なのは身体に良くない。早いうちから自分を決めてしまうことはないんだ。

沈黙。

ピピ　（うれしくなって、にっこり笑って）きっと、世界の体調が良い時って、あなたみたいな人が何人もいるときなんだわ。

老人　たくさんの色があれば自然とラブリーな気分になる。

ピピ　（さらにうれしくなって）ウエイター！この方にチョコレートを！

ウエイターの声　あいよ。

ウエイター、渋々といった感じでナポリタンチョコを持って上手から登場。

老人の前にチョコを置く。

老人、チョコの包みを開け、食べる。

（チョコの包みはテーブルのてきとうなところに置く）

老人　ふむ、悪くないな。

暗転。

⑤

心象風景

inspired by Erdal Inci

舞台後方には白い枯れ木が横一列に並んでいる。

沈黙。ときおり、乾いた枝が折れる音が鳴る。

ふいにシューマン共振の音が流れる。

すると、ライトブルーのフード付きトレーナーに、ライトブルーのスウェットパンツという恰好（裸足である）の人間が（以下、彼らをライトブルー人間とする）二人、縦に列を作って、トレーナーのポケットに手をつっこんだまま、うつむきながら、小走りで上手から登場し、そのまま下手袖へ退場する（ライトブルーの二人の体格は同じくらいが好ましい）。

ライトブルー人間二人が退場すると、シューマン共振、止む。

沈黙。ときおり、乾いた枝の折れる音が鳴る。

再びシューマン共振、鳴る。すると、今度はライトブルー人間が三人、縦に列を作り、トレーナーのポケットに手をつっこんだまま、うつむきながら、小走りで上手から登場し、そのまま下手袖へ退場する（三人が舞台を横切るどこかのタイミングでカメラのシャッター音が鳴る）。

ライトブルー人間たちが退場すると、シューマン共振、止む。

沈黙。

犬の遠吠えが鳴る。

再び沈黙。

シューマン共振、鳴る。すると、トレーナーのポケットに手をつっこんだライトブルー人間が三人、縦に列を作っ

て、うつむきながら、小走りで上手から登場し、そのまま下手袖へ退場する。

先の三人が舞台中央へさしかかるタイミングで、トレーナーのポケットに手をつっこんだライトブルー人間が二人、縦に列を作って、うつむきながら、小走りで上手から登場し、そのまま下手袖へ退場する。

ライトブルー人間二人が退場すると、トレーナーのポケットに手をつっこんだライトブルー人間が四人、縦に列を作り、うつむきながら、小走りで上手から登場し、そのまま下手袖へ退場する。

ライトブルー人間四人が退場すると、シューマン共振、止む。

右の一連の流れのどこかのタイミングでカメラのシャッター音が鳴る（間を開けて三回程）。

犬の遠吠え、鳴る。
沈黙。ときおり、乾いた枝の折れる音が鳴る。
シューマン共振、鳴る。すると、トレーナーのポケットに手を突っ込んだライトブルー人間たちが途切れることのない列を作り、うつむきながら、小走りで上手から登場し、下手袖へ退場する（退場したライトブルー人間は裏から上手へ回り、再び舞台へ）。
延々と、出てきては消えるライトブルー人間たち（しばらくこの場面は続く、ときおり鳴るシャッター音、乾いた枝の折れる音、犬の遠吠え）。
そして突然、琵琶の音が一音だけ鳴る。すると、ライトブルー人間たちは、両耳の横で握り拳を作り（肘は直角）、腕を前後に揺さぶりながらの小走りになる（うつむき気味で）。

ライトブルー人間ら　ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ（次の合図があるまでずっと続ける）。

しばらくこの場面が続く。

そして、再び、琵琶の音が一音だけ鳴る。

すると、ライトブルー人間ら、一斉に各々が思う枯れた針葉樹のポーズをとる（彼らはその場に止まる）。

枯れ木になったライトブルー人間ら、各々のタイミングで悲し気にうめく（あくまで静かな雰囲気を壊さない程度に）。

ときおり乾いた枝の折れる音。すると、ライトブルー人間のひとりが痛がる。

ライトブルー人間　（痛そうに）ウッ！

しばらくこの場面が続く。
そして、再び、琵琶の音が一音だけ鳴る。
すると、枯れ木になったつもりのライトブルー人間らが完全に黙り込む。
沈黙。
ふいにバカでかいオナラの音が鳴る。
すると、ライトブルー人間全員が（舞台袖にいる者も含めて）狂ったように叫びながら、両手を斜めに上げ、それぞればらばらに客席を通り抜け、劇場後方のドアから退場し舞台には誰もいなくなる。
沈黙。
暗転。

⑥

もう一度言ってくれ

⑤で使った白い枯れ木はそのまま舞台上にある。

それから、舞台中央寄りに二つの井戸（間隔を開けて横並びに）がある。井戸のまわりには枯れ葉が敷かれている。

下手側の井戸にはババ・ダンカンが腰掛け、上手側の井戸にはギルモア・リンチが腰掛けている。

各々、違う方向を見ている二人。

沈黙。

ババ、座りながらも、軽く足を動かし、足だけの舞踏を始める。

しばらくしてババ、足だけの舞踏をやめる。あまりしっくりこないといった様子。

沈黙。

ギルモア、ババに目をやり、いったん目をそらし、再びババを見て、話しかける。

ギルモア　君は（ババの井戸を指差し）、そ

の井戸からやって来たのか？

ババ　（ゆっくりギルモアを向いて）あぁ。

沈黙。

ババ　君は（ギルモアの井戸を指差し）、その井戸からやって来たのか？

ギルモア　あぁ。

沈黙。

ギルモア　巡礼のような夜だ。

ババ　あぁ。

沈黙。

ババ　受話器になってしまったかのような夜だ。

ギルモア　あぁ。

沈黙。

ギルモア　君は……、君は良い井戸を持っていそうだ。

ババ　もう一度言ってくれ。

ギルモア　私は詩人でもある。

ババ　君も良い井戸を持っていそうだ。

ギルモア　色を失った王がいるはずだ。

ババ　私は舞踏家でもある。

ギルモア　もう一度言ってくれ。

ババ　私はマルクスを踊った。

ギルモア　土には甘くて緻密な部分もある。

ババ　もう一度言ってくれ。

ギルモア　私はマルクスを貼りつけた。

ババ　どこに？

ギルモア　空間に。

沈黙。ババ、ギルモア、うつむく。

ギルモア　（うつむきながら）椅子になった

気分だ。

間。

ババ　（うつむきながら）椅子になった気分だ。

ギルモア　（顔を上げて）何を載せる？

ババ　（顔を上げて）一晩の不在を。君は？

ギルモア　耳の穴からお花が生えてきそうな感じだ。

ババ　大きな？

ギルモア　小さな。

ババ　鮮やかな？

ギルモア　単色の。

沈黙。

ババ　尻の穴から錨が垂れてきそうだ。

ギルモア　もう一度言ってくれ。

ババ　私は意識の浅瀬に潜む蜆だ。

ギルモア　その言い回しは好かんね。

ババ　そんなに見ることがしたいか？

ギルモア　ぼやけていれば満足だ。

ババ　光は？

ギルモア　小さじ一杯だけ。

ババ　足りるか？

ギルモア　十分さ。

沈黙。

ババ　本当はブリキの水差しのように静かになりたいんだ。

間。

ギルモア　私はちびた色鉛筆のようにしらじらしくなりたい。

間。

ギルモア　朝のミルクのように注がれたいか？

ババ　もう一度言ってくれ。

ギルモア　私は言葉の指揮者だ。

ババ　私は動作の演奏家だ。

間。

ギルモア　見たいか？

ババ　見たいとも。

間。

ババ　見たいか？

ギルモア　見たいとも。

ギルモア、立ち上がり、白い枯れ木のどれかの枝を折って取る。折れた枝は指揮棒のように見える。

ギルモア、自分の井戸の前に戻り、折

った白い枝（以下、指揮棒）を見つめ、客席に向かって一振りする。

客1　（客席に混じっている。立ち上がり）やはり、価値は、さしあたり、この形態とは無関係に考察されなければならない。（カール・マルクス『資本論』、新日本出版社、2019年、p72）

客1、着席。

ギルモア、ババを見る。

ババ　もう一度言ってくれ。

ギルモア、客席に向かって指揮棒を一振りする。

客2　（客席に混じっている。立ち上がり）鉄、紙などのような有用物は、どれも、二重の観点から、質および量の観点から、

考察されなければならない。（同書、ｐ６６）

客２、着席。

ギルモア、客席に向かって指揮棒を二振りする。

すると、次の二人は同時に立ち上がり、各々、セリフを言い始める。

客５　（客席に混じっている。立ち上がり）

ｃ　鋳貨。価値章標（同書、ｐ２１８）

客１３　（客席に混じっている。立ち上がり）十五シェッフェルの小麦（同書、ｐ９７）

客５、客１３、各々セリフを言い終えると着席。

客１～１６はそれぞれ②で登場したＭＰＣ２０００のＰＡＤ１～１６に対応している。

ギルモア、ババを見る。
ババ、ニヤリとし、立ち上がり、舞踏のポーズを作って静止する。
沈黙。
ギルモア、指揮棒を構える。
沈黙。
ギルモア、指揮者の如く、指揮棒を振り始める。
以下、パフォーマンスが始まる。

客９　（客席に混じっている。立ち上がり）彼の欲求は絶えず更新され、他人の商品を絶えず買うことを命じるが、（同書、ｐ２２８）

ババ、客９がセリフを言い始めると、舞踏を開始する。
客９、着席。
気持ち良さそうに指揮棒を振るギルモア。

舞踏するババ。

客10　（客席に混じっている。立ち上がり）他面では彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に左右される。（同書、p228）

客10、着席。

舞踏を続けるババ。

ギルモア、大きな身振りで指揮棒を振る。すると、次の三人は同時に立ち上がり、各々のセリフを言う。

客6　（客席に混じっている。立ち上がり）みずからが使用価値であることを実証しなければならない。（同書、p154）

客11　（客席に混じっている。立ち上がり）したがって、リンネル価値に対象化された労働とまったく区別されない労働の凝固体であることが見てとれるような一身体を

つくることにある。このような（同書、p106）

客14　（客席に混じっている。立ち上がり）鹿が清水を慕いあえぐように〔旧約聖書、詩篇、四二・二〕ブルジョアの魂も貨幣を、この唯一の富を求めて慕いあえぐ。（同書、p240）

客6、客11、客14は各々、セリフを言い終えると、着席。

舞踏を続けるババ。

指揮棒を振り続けるギルモア。

次の四人のうち、客7、客8、客12は、前の人物のセリフがおおよそ半分程終えたとき、立ち上がり、自分のセリフを言う。

客3　（客席に混じっている。立ち上がり）商品流通は、形式的にだけでなく本質的にも、直接的な生産物交換から区別される。

（同書、ｐ１９８）

客７　（客席に混じっている。客３がセリフを半分程終えると立ち上がり）２　相対的価値形態と等価形態との発展関係（同書、ｐ１２２）

客８　（客席に混じっている。客７がセリフを半分程終えると立ち上がり）特定の商品、すなわち、金である。（同書、ｐ１２６）

客１２　（客席に混じっている。客８がセリフを半分程終えると立ち上がり）ところが、彼らは、彼が王であるから、自分たちは臣下であると思うのである。（同書、ｐ１０５）

客３、客７、客８、客１２は各々自分のセリフを言い終えると着席。

舞踏を続けるババ。

ギルモア、大げさに指揮棒を四回、振る。すると、客１５は指揮棒が振られ

るたびにセリフを最初から言い直し、四回目でようやくセリフを最後まで言うことができる。

客15　（客席に混じっている。客12が着席したタイミングで立ち上がり、ギルモアが大げさに指揮棒を振ると）落丁（ギルモア、指揮棒を振る）落丁（ギルモア、指揮棒を振る）落丁（ギルモア、指揮棒を振る）落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。（同書、ｐ２５５）

ギルモア、先の指揮棒を四回大げさに振った流れで、ためを作り、客15のセリフが終わるのを待って（客15はセリフを言い終えると着席）、最後の一振りをする（とても大げさに）。すると、客16が（客席に混じっている。素早く立ち上がり）長くてバカでかいオナラのポーズをとる。

長くてバカでかいオナラのポーズに連動して、長くてバカでかいオナラがスピーカーから流れる（まるでオーケストラの最後のロングトーンのように）。

ババの舞踏もオナラが鳴ったとたん、おもいきり爆発する。

客全員　（全力で拍手しながら立ち上がり）ブラボー！！！

（La Fin）

※なお、客４は自分のセリフを内に秘めながら、終演後すぐに（どこにも寄らず）まっすぐ家まで帰ること。